

秀 賞



わたしはわたし

福島県二本松市立岩代中学校

二年 門 馬 穂乃華

私は、中一の頃から特設陸上部で砲丸投げをしている。私の兄も、五年前は岩代中で砲丸投げをしていた。高校生になった今でも続けている。兄は、中学の時に二度全中（全国大会）に行った。高三の時には、インターハイに出場した。また、中三の時には、岩代中から「全中」に行く者として、新聞の一面を飾ったのだ。私は、そんな兄のことを尊敬している。今では、目標とする人でもある。

だが、その反面、兄が居るから嫌な思いをすることもある。それは、兄と私を比べられること。兄は、中学でも高校でも陸上競技で良い成績を収めているのに、私はダメダメなのだ。それなのに、他校の先生方には、「ほのかさんのお兄さんはすごい方だから、きつとほのかさんもすごいんだろね。」と言われ比べられてしまう。兄は、陸上をしている人の中で知名度が高い方だ。陸上の先生方は、兄のことを知っていることが多いので、たぶんなにげなく声をかけてくださるのだろう。

でも、中一の頃から今までずっと言われ続けた私は、比べられること自体が恐怖になった。それでも多くの先生方や選手の方に言われることは重なり、精神的にも追いつめられていった。だって、兄の妹

だから砲丸が上手とかそういうことは一切ないし、兄に砲丸を教えてもらえるのは、年に一度か二度しかない。そもそも、兄は休日も部活で忙しいから一緒に居る時間があまりない。だから、トレーニンングや練習は全て私自身でやってきた。苦しい練習にも耐え、自分の力にできた。

練習をたくさんやれば、記録が伸びるのは当たり前のことだ。ある大会で記録が一メートル以上も伸びた。しかも、県大会で入賞できなかったのに、この大会では前と同じメンバーで行われ、私は六位に入賞することができた。過去の中で一番嬉しかった。記録も自己新記録だった。これも私自身で努力し頑張ってきたからだと思います。誇らしかった。それなのに、周りの方々は、「まあ、あの子の妹ちゃんだから。」などと言って、なかなか私の実力だとは認めてくれなかった。

どれだけ頑張っても認めてくれる人は数少ないと思われ、中二の一時期私は落ち込んでしまった。私が砲丸投げをやっても、どれだけ頑張っても、認めてくれる人があまり居ないのなら、全然楽しくないし、やる気も出ない。すっかり投げやりの気持ちになり、私は練習するのをやめてしまった。

その時に、内心で思っていたことは、このまま砲丸投げをやめようかなということ。毎日悩んで、たくさん泣いて、いつの間にか自分自身を自分で苦しめてしまっていた。本来の自分を忘れるほど辛かった。

そんな、どん底にいた私を救ってくれたのは、去年まで一緒に砲丸投げをしていた、高校生の先輩だ。その先輩には、今まで教え切れないほど助けてもらった。私の心が晴れるまでずっと話を聞いてくれたり、相談に乗ってくれたりしたことも、たくさんあった。だから、私が今、兄と比べられ、精神的に

辛くなり、砲丸投げをやめようと考えているということを、先輩に伝えた。すると、先輩が私にアドバイスをしてくれた。あの一言があるから、私は今もこうして砲丸投げを続けているのだと思う。

それは、「家族は家族でも、一人一人個性や特技は違うから、お兄ちゃんはお兄ちゃん、ほのかはほのかなんだから、周りがなんと言おうと自分を信じてありのままの自分で頑張ればいいんだよ。」という一言。私はこの言葉がなかったら、陸上競技をやめていたと思う。

私はその言葉を聞いて、思ったことがある。兄に比べられて苦しんでいた時、私を苦しめていたのは私と兄を比べる方のせいだと思っていたが、自分を苦しめていたのは、自分自身なのだということだ。周りの声を気にしすぎて、考えて考えてどん底に落ちて苦しい思いをしていたのだ。

だから、私は今、先輩からいただいた言葉を心にしまい、周りの声や目は気にせず、頑張っている。以前のようにどん底に落ちそうになったら、先輩が言っていた言葉の「兄は兄、私は私」をスッキリするまで心の中でずっと唱えている。そうするようになってから、のびのびと投げられるようになった。たまに、周りの声が気になることもあるけれど、もう大丈夫。私には心強い言葉があるから。これからは、堂々と門馬穂乃華として、砲丸を投げてやる。